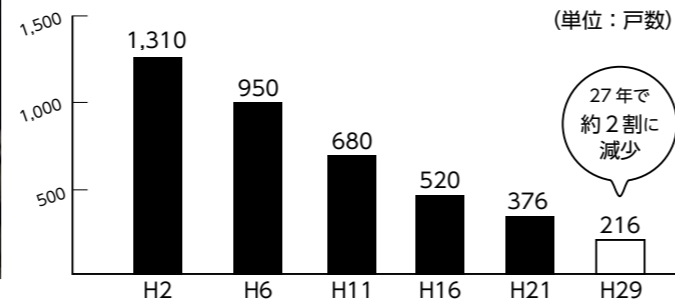




埼玉県内の乳用牛飼養戸数の推移 (埼玉県調べ)



①



①鈴木さんの牛舎では、1回の搾乳で計360～370kgの牛乳が採れます。②「我が子のよう」と言う鈴木さんに頭を撫でられて、少し照れくさそうに見える牛。③鈴木さんのことが気になって仕方ない牛たち。

むこともできますが、安全な牛乳を提供したい。我が子同然の牛たちを熟知した自分の手で365日、世話をしたいんです。だから長期旅行に行けないんですよ」と牛の頭を優しく撫でる鈴木さん。

昭和29年に1頭の牛を飼い始め、「昔から人とは違うこと、新しいことに挑戦したいと思っています。うちは農家でしたが、思い切って酪農の道に進むことを、二十歳の時に決意したんです」と酪農家になった経緯を話し、今では24頭が牛舎で飼養されるようになりました。

牛たちに与える餌は、「飼料をすべて購入してしまうと、費用がかかってしまうので、畑もあるし、自分で作ったものを与えています」と代々受け継がれた畑を酪農に活かしている鈴木さん。

昭和62年に建てられた牛舎を見ながら、三芳町の魅力をこう語ります。「東日本大震災時に全く被害がありませんでした。地盤が固く、水害もほぼない。自然災害に強い三芳町は、素晴らしいと思います」。

地域の子どもたちに、「酪農や牛に触れ合ってもらいたいから」と40年前から始まった小学生の「写生会」では毎年、藤久保小学校の児童が訪れ、牛の絵を描きます。「初めて見る牛にみんなびつくりするんです」と目じりにしわを作り笑います。

牛乳を提供する、酪農を営むことが、食への意識向上や郷土愛を醸成することになる。まさに「食育」――。

「牛乳は『白い血液』とも言われています。ですから、しっかりと牛を見守り、安全な牛乳を提供することが、生産者としての使命です」と言う鈴木さん。愛情をたっぷり注がれた牛たちですが、乳が出なくなった牛は

命に、感謝。安全な牛乳を。

町内で唯一、酪農家として牛乳を提供している藤久保の鈴木修一さん。牛乳は「白い血液」と言う鈴木さんに、お話を伺いました。



50年以上酪農を営んでいる鈴木修一さん。どんな時でも屈託のない笑顔を絶やさない人柄は、牛たちにも伝わっているようです。

参加者募集中

藤久保芸能会の活動

「約40年前にお囃子を始めました」と話す鈴木修一さん。数年前まで藤久保のお囃子会「藤久保芸能会」の会長を務めるなど、積極的に町の伝統芸能を守る活動を行っています。地元・木宮稲荷の春の祭礼(毎年4月20日)、天王様(7月14日)に奉納されているほか、9月に行われる「みよしまつり」で日頃の練習の成果が披露されます。毎週練習を行っています。「見学でもよいので、ぜひ地元のお囃子に触れてみてください」と鈴木さん。

中は 鈴木修一さん

どうなるのでしょうか。食用の牛になります――。役目を果たした我が子同然の牛たちと別れについて、「とても悲しいですが、牛はペットでなく家畜。そう割り切っています。人が生きるために、命を捧げてくれる牛たちに感謝しなければ」と言う鈴木さんが願うことは。

「栄養をバランスよく採るために、ぜひ牛乳を飲んでほしいと思います。同時に、なぜ牛乳を飲むのか、牛肉を食べられるか。命に感謝することを忘れないでほしいです」。



①自身の畑で収穫した牛の餌となる葉を手にする鈴木さん。「最初は苦手そうにしていますが、慣れるとしっかり食べてくれます」。②牛の生年月日や名前などの情報を掲示し、特徴を常に把握。

「毎日、朝晩2回搾乳をして、新鮮な牛乳をお届けしています」と話すのは、町内唯一、藤久保で乳用牛を飼養している鈴木修一さん(69)。毎朝5時過ぎから作業を始め、牛舎内の牛たちの「表情」から体調や変化を読み取ります。

「毎日見ているから、牛たちの気持ち分かるんです。牛はとってもデリケート。誰かに頼

埼

玉島の畜産は、都市近郊に立地し、地の利を活かして首都圏の人たちに新鮮で安全な食肉や牛乳などを提供して発展してきました。



「牛にも表情があり、その変化を読み取ることで体調を知ることができる」と鈴木さん。